

法話

仲代達也の仕事力考

人を感動させるために、人を
引きつける魅力を付けるために

丸川 春潭

1. プロローグ

昨年（平成20年）の夏の学生修禅会で、その前の週の新聞記事をネタにした新作提唱を試みました。その後何度かこれを見直して話をしてきました。今回もそうではありますが、今まで見えていなかった切り口などがその都度新たに見えてくるものであります。自分の反省と自戒を含めてお話しいたします。

2. 仲代達也の語る仕事力

昨年8月24日の朝日新聞に、「仕事力 仲代達也(俳優・演出家、1932年生まれ、『人間の条件』『切腹』『影武者』『どん底』主演)が語る仕事」と題した広告記事が載っておりました。仲代氏はその記事の中で、

【私が考える役者というのは、どんな商売でもそうであるように、何らかの修業を経て、俳優として、また人間としての意識を持ち、お客さんを感動させ、人間とは何か、人間の命とはどういうものかを常

【自分に問い、それを表現する志と技を磨いていく存在なのです。】と語っております。

仲代氏自身が言っているように、この語りは、すべての商売人（職業人、道を求める人）に共通して言えることであると私も考えます。

逆にこのくらいの意識で自分の商売（仕事）をとらえていないと、仕事力は付かないということであります。仲代達也氏は秀でたその道の求道者であり、素晴らしい魅力ある人物であると改めて思いました。

この言われるところの「どんな商売」にも共通するところを、少し詳細に吟味してみたいと思います。

（１）「人間としての意識を持ち」というフレーズ

役者（俳優）が、人間としての意識を持って演じているというのはやはり、一流である証拠であると考えますが、これをすべての職業人が持ってやっているかが問題であります。

学校の先生は、当然持っていなければならないでしょう。

お医者さんもそうでしょう。

政治家ももちろん、そうなければならないでしょう。

科学者・技術者も人間としての意識を持っていなければ、その発展は危険なものになるでしょう。

商売する人も、儲ければ何を売っても良いというのではなく、やはり「人間としての意識」を持ち、その篩ふるいにかけての商売でしょう。

お百姓さんにしても、漁師さんにしても、人間としての意識を持ってやらなければ、人間と地球の共存は持続できないでしょう。

（２）「お客さんを感動させ」というフレーズ

学校の先生が生徒に感動を与えられなくなったら、教師は務まらない。

お医者さんは、その医術で患者を感動させる。商売人は、やはりお

客さんを感動させられなくなったら、早晚店じまいになるでしょう。

政治家であれば、次の選挙は落選でしょう。アメリカの大統領選挙など、まさにこの差ですね。

科学者、技術者、お百姓さん、漁師さんの感動させる相手は、直接的ではなく間接的ですから見えにくいですが、その作ったものがクリエイティブであれば、時が経てば必ず正直に伝わってゆくものであります。

(3)「人間とは何か、人間の命とはどういうものを常に自分に問い」というフレーズ

各職業ごとについては言及しませんが、その道の一流は、「人間とは何か、人間の命とはどういうものを常に自分に問う」ことをしていると考えます。

わたくし的に(注1)言いますと、「人間とは何か」「人間の命とはどういうものか」をまずしっかり押さえておかなければ、何をやっても本物にはならないと言いたいところです。これについては、後から詳しくお話しします。

3. 仲代達也の語る人間の魅力

また仲代氏は、朝日新聞の先ほどの記事の続きの中で、人間の魅力について語っています。

【俳優の魅力とは何かについても懸命に考えました。その人の魅力にお客さんはついてくる。その事実は分かっている、身につける方法はどのような指導書にも書かれていないのですが、30歳の頃にシャンソン歌手イブ・モンタンの歌を聞いたことがあります。衣装は黒いシャツを着ているだけ。しかし「枯葉」を歌い始めた瞬間にピンとくる魅力を感じたのです。口で説明はできない、どうすれば手に入ることか見当もつかない。でも、その魅力というものがなければ人を引きつ

けることができないと痛感しました。それは今でも分からないし、明確に人に教えることも難しいままなのです。】

(1) 「その人の魅力にお客さんはついてくる。」というフレーズ

この語りの「人の魅力」については、俳優だけに限られたことではなく、職業の有無に関係なく、人間社会に生きているすべての人に絡んでくる命題の一つであります。そしてまた、その魅力というものは一つとして同じものはなく百人百様であることも、考えてみれば面白くまた深いものがあります。

(2) 「口で説明はできない、どうすれば手に入るのか見当もつかない。」「それは今でも分からないし、明確に人に教えることも難しいままなのです。」というフレーズ

この実感は、やはり俳優の生命をかけて取り組んできた長年の命題であることを示しているのだと思います。すなわち、人間共通の核心に触れる命題でもあるわけであります。この命題は、一流の者が違う道を登っても最後に残ってくる共通の関門であります。正直に白状しておられるところが、一流の証明でもあると認めます。特に「見当もつかない」「難しいまま」という台詞は、わたくし的には、限りなく近いところまで到達されていると見えます。

4 . 仲代達也の提起した命題への解答はないのか？

(1) 修行とは

仲代達也氏は、始めのところでこうも言っております。

「どんな商売でもそうでもあるように、何らかの修業を経て……」と。

ここで「修業」という言葉を使っているのに、私は注目します。

ただ私は、「修業」は「修行」と表記するのがふさわしいと考えま

す。「修業」は知識や技術を修得するために努力することでありますが、「修行」は仏道や武道などの実践を通して自己を鍛え、磨くこと（人間形成を行うこと）を意味しているからであります。仲代氏は、俳優としての実践（俳優道）を通して人間形成を目指しておられる求道者であると思います。

修行すなわち「行を修める」ということは、知識や技術を得ることではなく、実践の中で言葉を超越理屈を超えたものを身に付ける行為であります。

修行という言葉を使うものは、技芸道や武道で道が付く茶道、華道、書道、香道、剣道、柔道、弓道等々であります。もちろん「修行」という言葉の発信源は宗教からであると思いますが、宗教でもいろいろあり、またピンからキリまでありますから、眉に唾まゆつばを付けて本当の宗教かどうかを点検する必要があります。

宗教の代表的な世界宗教（儒教、仏教、キリスト教、イスラム教等）が生まれて2000年以上経過しておりますから、その宗教の創始されたときの宗教的生命を生き生きと現在まで伝承しているかどうかが大いに問題になる訳です。

まず本物の宗教かどうかの篩に、この「修行」が使えます。すなわち創始された宗教的生命（教え、悟り）を、行ぎょう（注2）を修めて追求しているかどうか、修行がしっかりその宗教の中核に残っているかどうかで、まず最初に篩にかけることができます。

ただ修行と言っても、これまたピンからキリまでありますから、その真偽、レベルについて、注意する必要があります。

技芸道、武道、宗教道を問わず、その道が本物かどうかの篩の第二弾が必要になります。言い換えると、その修行のレベル、真偽を見極める尺度が必要であり、しかもそれは、技芸道、武道、宗教道に共通しているはずのものです。

その尺度は、「三昧ざんまい（注3）の深さ」がその尺度となるのであります。

(2) 三昧の深さ

すべての宗教には、元来その宗教が創始された当初には、例外なく、それぞれの三昧に至る手段・方法を持っていたのであります。その手段・方法は、祈り、礼拝、^{きとう}祈祷、^{めいそう}瞑想、坐禅、読経、賛美歌、踊り等々であります。技芸道や武道の場合は、それぞれの道の^{けいこ}稽古に打ち込んでゆく三昧が、本来的に付き物になっているのであります。

ところが、たとえば儒教のように、江戸時代に日本に渡来した朱子学、陽明学のように、ほとんど行というものが脱落してしまっている。儒教の源流の孔子の『論語』を見れば明白であります。極めて深い本格の宗教の根源を持ち、当然深い三昧を伴った行を持っていましたが、日本に本格的に入ってくるまでの2000年の経過のなかで、行が脱落してしまっただけです。こうなると宗教でも道でもなく、学でしかなくなってきたのであります。最初儒学者であった今北洪川禅師は、これに飽きたらず、見切りを付けて禅修行に切り替えられたのであります。

技芸道における茶道にしても、お点前の手順や作法の変化を覚え込むことに主眼が止まってしまうと、道が外れて単なるお茶の^{けいこ}稽古ということになってしまうのであります。これに対して、奥田正造氏(『茶味』の著者)の茶道のように、点茶の反復練習の行を徹底し、こころの鍛錬、集中力・三昧力の養成に主眼が置かれていると、本当の人間形成の茶道ということになるのであります。

武道における剣道においても、人間形成の剣道というからには、技を磨く課程での稽古に三昧力の養成という柱がなければならぬのであります。当てれば勝ちとなる竹刀剣道がスポーツになり、勝負に力点が置かれると、剣道から道が外れるというものです。これに対して、人間禅付属^{こうどう}宏道会の剣道は、古流の型を非常に重視し、これを反復練習する。防具稽古においても、竹刀を真剣と心得て文字通り真剣に打

ち込んでゆく。行を修める中に真剣な三昧の深まりが蓄積され、三昧力が身に付いてくる剣道になっている。これでこそ人間形成のための本当の武道と言えます。

禅においても、同じことが言えます。禅は最初から最後まで三昧、三昧であります。臨済禅の長所はさておいて（後述しますが）、弱点を強いて上げれば、公案三昧になることの基本が、ややもすれば公案の透過に気持ちが流れがちな点であります。これは剣道において、段位と勝負に主眼が移りやすいのと同じことであり、本格の人間形成のための禅ではなく、禅学に成り下がるのです。

（３）仲代達也の提起した命題

氏曰く、「俳優として、お客さんを感動させ、人間とは何か、人間の命とはどういうものを常に自分に問い、それを表現する志と技を磨いていく。」「俳優の魅力についても懸命に考えました。その人の魅力にお客さんはついてくる。その事実は分かっている、身につける方法はどのような指導書にも書かれていない。」「口で説明はできない、どうすれば手に入るのか見当もつかない。でも、その魅力というものがなければ人を引きつけることができないと痛感しました。それは今でも分からないし、明確に人に教えることも難しいままなのです。」

この氏の告白を要約すれば、一つは、「人を感動させるにはどうしたらいいか？」ということであり、もう一つは、「人を引きつける魅力をどうして身に付けるか？」ということにあります。

（４）仲代達也の提起した命題への解答

それには、氏自身が既にその解答に自ら方向を示しておられます。氏は、日本の歴代のあまたの俳優の中でも最も人を感動させることができ、最も人を引きつける魅力を持っている俳優の一人であると私は

思います。さすがであります。

氏は、「人間とは何か、人間の命とはどういうものを常に自分に問う」と語られています。解答はここにあるのであります。

「人間とは何か?」「人間の命とはどういうものか?」をその根源においてしっかりとつかむことができれば、「人を感動させるにはどうしたらいいか?」ということも、「人を引きつける魅力をどうして身に付けるか?」ということも^{おの}自ずと見えてくるのであります。

したがって次に、「人間とは何か?」「人間の命とはどういうものか?」をつかむ方法についてお話ししましょう。そしてどうして「人間とは何か?」「人間の命とはどういうものか?」をつかむことができれば、「人を感動させる」ことができ、「人を引きつける魅力」が身に付くのかということについても言及します。

5. 「人間とは何か?」「人間の命とはどういうものか?」を解明する方法

この命題を言い換えますと、これは「本当の自分探し」と言えます。

「本当の自分探し」を少し説明しますと、ホモサピエンスという生物種の一つである自分は、たかだか100歳ぐらいしか生きられない、はかない生き物ではありますが、このはかない命の生き物に、はかないと同時に即、永遠の命を宿しているのであります。この永遠の命の自分を「本当の自分」と言い、それをはっきりとつかむのが、ここの命題の解法になるのであります。

はかない命の生き物である人間(自分)に永遠の命を宿していると初めて人間が気が付いた(発見した)のは、紀元前5世紀からの5、600年の間で、^{しゃかむに}釈迦牟尼をはじめ、歴代の世界宗教を起こした宗祖が地球上のいろいろな地域でそれぞれ独自に同じ「永遠の命」に気が付き、それぞれ独自の宗教を創始したのであります。この命題の解を得るのは、決して不可能ではないのです。既に解を得た実例があるのですか

ら。各宗の宗祖がその実例であります。

仲代達也氏も述べておられますように、この命題の真の解は、言葉や活字で表現できるものではなく、修行という行によって自分で感得し、自ら悟る以外にはありません。そして、修行（行を修める）と言っても、本当の三昧になり、絶対の場に自分が全身全霊で入り込むことが、これをつかむ必須条件になります。相対的ジャンルの学問領域を超えた道（技芸道や武道）に入り、宗教の領域（絶対の世界）に入らなければ、その解をつかみ、悟り、納得することはできません。

これをつかむのに、万人に最短距離の道が禅の道であり、禅の修行なのであります。

6 . なぜ禅の修行なのか

道という字が付く、技芸道や武道に本当の三昧の行が中心に据えられておれば、この命題に限りなく近づくことはできます。古来よりその道の名人とか達道の人と言われている人は、意識するしないは別にして、本当の自分になりきれているし、「人間とは何か？」「人間の命とはどういうものか？」についてかなりの確信を得ていると思います。しかしそれは、茶道であれ、剣道であれ、俳優道であれ、容易なものではありません。少なくとも30年、40年の長い年月の間、それに専念しなくては届かないことを歴史は語っています。逆に、茶人や剣道家が、その道の修行と同時に禅をも修することによって、その道を深く究めたという多くの事例を歴史は語っています。

本来宗教というものは、永遠の命を自分の中にしっかりと認識することによって、根本的な救済としていたものです。そのためには、しっかりした行が深い三昧をもって実践されているということが、外せない必要条件になります。これが儀式の中に埋没してしまい、深い三昧の行取が疎^{おろそ}かになってきていると、永遠の命を自分の中にしっかりと認識するということはできず、本来的な救済ができなくなっ

ていると断言できます。

しかしさらに、宗教として最も難しく大切なことは、宗祖が^{かんなん}艱難辛苦してつかまれた「永遠の命を開示した境涯」(悟りの境涯)が、どのようにして今に伝承されているかということであります。この「悟りの境涯」は既に述べましたように、言葉や文字で表現できるものではなく、書き物にして残しても誤解を残すだけでありますし、いくら大勢の信奉者の集まりが長年続いていたとしても、いくら整備された組織が構築され、儀式が厳かに実践されていたとしても、^{がりょう てんせい}画龍に点睛(注4)を欠くならば、本当の宗教とは言えません。過去の人類の歴史の中でも、宗教が功罪相半ばするぐらい、人間にとって過酷な悲劇をもたらしてもいるわけは、宗祖が艱難辛苦してつかまれた「永遠の命を開示した境涯」(悟りの境涯)が伝わっておらず、生きた点睛を欠いているからであります。

他の宗教、宗派のことはさておいて、臨濟禅の正脈の法は正しい印可証明(注5)をもって人間禅に滴滴伝承されております。すなわち、インドにおいて28代^{ぼだいだるま}菩提達磨大師から、一器の器の水を次の器に移すようにして伝承され、中国に伝えられて27代目^{きどうちく}虚堂智恵禅師の時に、日本からの学僧^{なんぼしゅうみょう}南浦紹明禅師(後の大応国師)が、厳しい修行の後その法の^{えんげん}淵源を究めて嗣法となり日本に正法を持ち帰られました。そして大燈国師、関山国師、白隠禅師を経て、滴滴伝承して昭和の耕雲庵英山老師(釈迦牟尼から数えて81代、達磨大師を初祖として54代、日本に伝えられた大応国師から数えて27代目)に伝えられ、人間禅が開かれたのであります。

正脈の師家^{しけ}(注6)の元でなければ、「永遠の命を開示した境涯」(悟りの境涯)を得ることはほとんど不可能であります。万一到達したとしても、それを証明することはできません。

もうひとつ、なぜ今禅かというとき、なかんずく人間禅は「永遠の命を開示した境涯」(悟りの境涯)をつかむために、必要にして不可

欠のもの以外のあらゆる装飾をすべてそぎ落とし、単刀直入にその悟りに迫り、それをつかむ仕組みと工夫がなされており、しかもそれが老若男女、貴賤、人種に囚われることなく、すべての人に門が開かれているのであります。

7. 「感動」と「魅力」

仲代達也氏は、俳優として、演出家として、「人に感動を与える」こと、「人を引きつける魅力」についての命題を持っておられます。

「人に感動を与える」と言うとき、自分は感動はしているが、それを他人に伝えることができないということはあっても、自分が感動しないで、人を感動させることは、不可能であります。

禅の悟りは「永遠の命の開示」であり、その悟りの境涯を「永遠の命を開示した境涯」と表現しましたが、その悟りの世界は広大で幽遠で深く高いものであります。そして人間の心は、これまたとらえどころがなく、また無限の活力を持っております。その悟りが深まれば深まるほど、自分の心を知れば知るほど、感動もまた深く大きくなるというものであります。

人間は考える葦と言われていますが、その考える、思考することによって、現在の情報技術を、生命科学を、宇宙科学を進歩させてきました。それと同時に、人間はその考える葦の能力を意識的に一時棚上げて無思考（非思量）になることによって、もう一方の素晴らしい文化（精神文化）を築き上げているのであります。先に述べました紀元前5、6世紀からの約500年間に現れた宗祖達が、非思量の三昧を通して絶対の場に入り、科学技術の発達に劣らない、素晴らしい文化を発展させて現在まで伝承してきているのであります。

わたくし的に言えば、「人に感動を与える」ことの主要な力の源泉は、自分の感動の大きさ深さにあり、その伝達の巧拙は、伝えたいという思いが強ければ、自ずと付いてくるものであると言いたい。

「人を引きつける魅力」についても同様で、自分が感動するものを深く大きく持っているかどうか最も重要なことで、それがありさえすれば、それは隠そうとしても自然に香り、その背中からオーラーを発して、人はその人間的魅力に引かれるものであると考えます。

8 . エピローグ

仲代達也氏の仕事力について、そしてその中身としての「他者に与える感動」と「他者を引きつける魅力」について、禅的考察をしてまいりました。

氏の場合は、まさにプロの俳優としての「他者に与える感動」と「他者を引きつける魅力」が氏の最大の命題であったわけですが、翻って、われわれの命題である人間禅の『立教の主旨』(注7)の普及進展においても、「感動」と「魅力」が常に問われているわけであります。

私は最近、「布教力」「感化力」という言葉を使っておりますが、その中身はここでいう「感動」と「魅力」に密接に関わっていると考えております。

道号を貰いたての方から師家に到るまでの、すべての教団員の「布教力」「感化力」を総点検して見る必要があると思います。そしてその尺度は、教団外の方々へどれだけ働きかけたか、どれだけの人ほつぼだいしんの発菩提心とも(注8)に火を点すことができたか、持たれている道心の灯火ともしびをどれだけ大きく燃え上がらせることができたかが、「布教力」「感化力」の尺度になるのであります。

人間形成における「境涯」は、大級(注9)というように固定的に現されるものではありません。すなわち、自分の生に対する感動の大きさと、それから自然に醸し出される人の香りの魅力は生きていて変化するものであります。この生きた境涯は、法悦の味わいであり、報恩の思いであり、無縁の慈悲心(注10)であります。この生きた境涯が、結果として「布教力」「感化力」になるのであります。

時はまさに年末であります。すべての教団員は、自分のこの一年間の布教力、感化力を点検し、自分の生きた境涯を反省してみなければなりません。言うまでもなく、布教は支部長から、師家から言われてするものでもなく、言われたからといってできるものでもありません。自らの境涯の^{ほとばし}進りとして出てくるものであります。師学の別なく禅者として、日々に新たに、感動深く、魅力的でありたいものであります。

合掌

(平成21年11月30日、西東京支部摂心会における法話より)

編集部注

- (注1) わたくし的に：私として。どちらかという、私はそう思う。
- (注2) 行：修行。実践。
- (注3) 三昧：全身全霊をもって一事に打ちこみ、それに成りきってゆくこと。厳密には、正念の相続一貫、心境一如・物我不二^{もつがふに}、正受にして不受の三つの意味を持つ。
- (注4) 画龍点睛：^{りょう}(梁の画家が白竜を描いて、その^{ひとみ}瞳を書きこんだところ、たちまち風雲生じて白竜は天に上ったという故事から) 事物の眼目となるどころ。物事を完成させるための最後の仕上げ。
- (注5) 印可証明：禅の指導者が修行者の悟境を点検して、その円熟が認められたときに、修行者の悟りを認可し証明すること。印可を得てその法を^つ嗣いで、はじめて師家となることができる。
- (注6) 師家：禅宗で、修行者を導く指導者をいう。修行者のことを学人という。
- (注7) 『立教の主旨』：人間禅教団を創始された第一世総裁耕雲庵立田英山老師は、『立教の主旨』5カ条を定められ、人間禅の精神を明らかにされた。
- 一 わが教団は、自利利他の願輪を廻らして、ほんとうの人生を味わいつつ、世界楽土を建設するのを目的とする。
 - 一 わが教団は、坐禅の修行によって転迷開悟の実を挙げ、仏祖の

慧命を永遠に進展せしめる。

- 一 わが教団は、正しく・楽しく・仲よく 人間味豊かな人人の家庭である。
- 一 わが教団は、禅 本来の面目なる自由と平等とを尚び、各自の人格を尊重する。
- 一 わが教団は、神秘を語らず迷信を説かず、堂々と如是法を挙揚し、合掌して人間禅を宣布する。

(注8) 発菩提心：悟りを求める心を起こすこと。

(注9) 大級：教団員の修行歴により、地大級から師家分上まで7階記がある。

(注10) 無縁の慈悲心：愛するの救うのという思いを離れて、自ずからその人の薰りとして発する深い愛。

著者プロフィール



しゆんたん
丸川春潭（本名 / 雄浄）

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅教団総裁・師家。
庵号 / 葆光庵。

資料 朝日新聞（平成20年8月24日付け）の記事より（下線は編集部）
 仕事力：仲代達也が語る仕事「人間の野性と本能を描く」（2）

俳優には何ができるのだろう

「普通の人とは違う人間の野性を生きる」

これは、亡き妻宮崎恭子が若い俳優たちに語りかけた言葉で、「俳優の仕事は、人間の野性、あるいは本能を描くこと。それに知が絡み合って人間を演じていく」、そういう意味です。私たちの日々の営みは、建前とか社会性でつづられていくものだし、それが秩序を作っていくのですが、人間には本音があり本能がある。深くて複雑な人間を見つめながら、こんな生き方もあると表現していくのが俳優の仕事だと思えます。

新劇の世界は、一に作者、二に演出家、三番目にやっと俳優という位置づけになっているような気がしていますが、どんなにすぐれた脚本があっても、それを俳優が肉体化しなければとても成立しません。ですから、それに応えられるような格の高い演技が要求されるでしょう。私は映画の仕事にも多く携わっていますが、ここでも

監督などが、作ろうとする一本の作品のことを考えてオーディションをし、役柄に沿う人を選ぶ。昨日まで役者としての経験もない素人でも任に合えば使い、あとは放り捨てるような現状です。それは、プロとアマチュアの差を認めていないということです。

私が考えている役者というのは、どんな商売でもそうであるように、何らかの修業を経て、俳優として、また人間としての意識を持ち、お客さんを感動させ、人間とは何か、人間の命とはどういうも



紅梅（小寺克彦氏撮影）

のかを常に自分に問い、それを表現する志と技を磨いていく存在なのです。

魅力って何だ？

若い頃の私は、とにかくうまくなりたいと思って世界中の演劇書を読みあさりましたが、なかなか俳優の感覚にピンとくるような技術指導書はありませんでした。

ある日寄席を見に行った時のことです。紙切り芸の名人、初代林家正楽さんの舞台で「あ、これだ」とひらめくものがありました。正楽さんはお客さんの目の前で和紙をはさみで切っていく。仕上がったら扇子を持ってパーッとあおぐのですが、和紙が本物の蝶ちょうのように生き生きと舞うのです。ここには俳優という商売の、「表現の秘」があると強く感じました。

また、俳優の魅力とは何かについても懸命に考えました。その人の魅力にお客さんはついてくる。その事実は分かっている、身につける方法はどのような指導書にも書かれていないのですが、30歳の頃にシャンソン歌手イブ・モンタンの歌を聞いたことがあります。衣装は黒いシャツを着ているだけ。しかし「枯葉」を歌い始めた瞬間にピンと来る魅力を感じたのです。口では説明できない、どうすれば手に入るのか見当もつかない。でも、その魅力というものがなければ人を引きつけることができないと痛感しました。それは今でも分からないし、明確に人に教えることも難しいままなのです。

つまり俳優は自分で、日々人間へのアンテナを張り続けていくしかないのですね。でも、簡単ではないからこそ面白いのではないですか。

(談)